

点から面へ 地域医療のグローバル化

(奈良県) 社団法人 地域医療振興協会 近畿地域医療支援センター 武田 以知郎

義務年限終了後、しばらく地元奈良県の県立五條病院へき地医療支援部長という立場で地域医療にかかわってきましたが、現在は社団法人地域医療振興協会（へき地医療を支援する公益法人）の近畿地域医療支援センターという部署で全国のさまざまな施設への代診や医療支援などを行っています。今までに北は青森県から南は鹿児島県までの全国各地の病院、診療所に赴き、特に医師不足となった最近では一年の三分の一近く出張暮らして頑張っています。よくほかの医師からも「先生、大変ですね」と声をかけられますが、子供のころから旅行好きで、自治医大入学時には奈良から栃木まで自転車

で乗り込んだり、東海道路徒歩旅行などとお歩くこととチャレンジ精神には自信があったからこそやってこれたのかもしれない。

今までの自分の仕事を振り返ると、義務派遣で赴任した小さな村レベルの地域医療から、県レベル、そして全国レベルとさまざまなステージでの地域医療を経験させていただきました。近接性や継続性など地域医療（プライマリケア）のプリンシプルに則ると、多くの卒業生が活躍しているように、一つの地域で腰をすえてがんばることも大事なのですが、県内の地域性の違いや全国各地の特色や先進性などを見ることで、地域医療をマクロでとらえる

という点ではそれなりに貴重なキャリアだったかもしれません。

このようなキャリアの中で、インターネットの普及は地域医療の流れに多大な影響を及ぼしたのではないかと思っています。私が村に赴任した昔はもちろんインターネットはなく、困った事があっても先輩に相談するぐらいでへき地医療の孤独感を味わっていました。しかし、インターネットが普及し始めて情報検索が容易になっただけでなく、メールやリストを介して全国レベルで情報を共有できるようになり、つながっている安心感を得るようになりました。その後、物理的なネットワークだけでなく、人的ネットワークもどんどん広がって行き、いろんな立場や考え方の人々がつながり、融合しながら地域医療そのものの流れを動かすようになっていきます。私がかかわったへき地医療支援部も、自治医科大学や（社）地域医療振興協会の働きかけで全国と同じような組織が互いに情報交換する場を設けていただき、問題点の共有化や解決を図れるようになっていきます。そのような情報交換の場が、やがてへき地保健医

療計画など国の施策に影響を与えるものに育っています。（現在はへき地医療支援機構連絡会議として生かされています。）

さて今後の地域医療の方向性を探るにおいて、限られた地域や限られた人で頭をひねるだけでなく、幅広く情報交換し、そして垣根を超えた連携協力をしていくことが重要だと感じています。医師確保対策においても、既に地域内の連携だけでなく、他府県や民間と協力して成果を上げている実例もたくさん見られ、今まではなかった柔らかな発想で魅力ある企画が生み出されつつあるようです。これからはおらが大学、おらが地域といった垣根を越えて、いいものを知り、連携あるいは融合することにより Win it to Win になっていくことが重要だと考えます。

地域医療対策は、限られた小さな地域や集団（点）から、もつとグローバル（面）に視野を広げ、限られた資源を有効に活用していく時代になってきました。

ただ、あくまでも、地域住民のためにという現場を大切にすることは忘れないでおきたいものです。